

「NEXUS 情報の人類史(上・下)」の衝撃

「人間の情報ネットワークの歴史は、進歩の進行ではなく、真実と秩序のバランスを取ろうとする綱渡りだ。二一世紀の私たちは、適切なバランスを見つけるのが石器時代の祖先よりもたいしてうまくない。」
ユヴァル・ノア・ハラリ

例年 10 月 27 日から 11 月 9 日までの2週間は、「秋の読書週間」ということもあり、今月は、今年の3月に出版された、ユヴァル・ノア・ハラリ著「NEXUS 情報の人類史(上・下)」(河出書房新社 柴田 裕之(やすし)訳)をご紹介しますと思います。著者のユヴァル・ノア・ハラリ氏は、「歴史学者、哲学者。1976 年生まれ。オックスフォード大学で中世史、軍事史を専攻して 2002 年に博士号を取得。現在、ケンブリッジ大学生存リスク研究センター特別研究員」(河出書房新社 HP より)をされている方です。ハラリ氏は、2016 年9月に出版された「サピエンス全史(上・下)」で世界的な名声を博しましたが、私も当時同書を読んで大変感銘を受けた一人です。また、その後出版された「ホモ・デウス(上・下)」、「21 Lessons 21世紀の人類のための21の思考」などが、「世界 65 の言語で累計 4500 万部発行されている」(同社 HP より)とのことでした。

今回の「NEXUS 情報の人類史(上・下)」は、副題にもあるように、「情報」という視点から人類の歴史を振り返り、AI 時代に向け、人類が情報とどのように向き合っていくべきかを考察する内容となっています。なお、「NEXUS」とは、「物事や人々の間のつながりや結びつきを意味する英単語」(実用日本語表現辞典より)です。

同書の中で、古代から現代まで、情報というものが、如何に人類を結び付けてきたか、神話等の物語の始まりから、文書や出版物の誕生、ラジオやテレビの普及、そして現代の SNS をはじめとするネットワーク上のコミュニケーション、そして AI によるこれからの展開などが述べられています。紙幅の関係で、十分ご紹介できませんが、ハラリ氏が強調されていたことの一つに、情報の持つ「不可謬という幻想」の危険性があると思われます。これが、顕著に表れる例として、宗教の聖典等があげられていますが、情報というものは、「不可謬(誤るはずがない)」という前提に立ってしまうと、必ず人間社会に何らかのひずみや悪影響を与えてしまうもののようです。

そこで、正しい情報を人々が共有するために、三権分立やマスコミなどの何らかの「自己修正メカニズム」が社会に必要であると同書では述べられています。ただし、最近の SNS などの現状に鑑みれば、全ての情報をオープンにすれば、自ずと正しい情報に結びつくわけではありません。特に、近年急速に進歩している AI が、今後の情報空間等にどのような影響を及ぼすのか、この本の中では強い懸念が示されています。AI は、囲碁の世界チャンピオンに勝利するなど、人間以上の「知能」を既に持っており、更なる発展が見込まれますが、一方で、人間のような「意識」は持っておらず、「魂の葛藤」のようなものがないので、我々が想定できないような行動や間違いを起こすおそれがあるとのことでした。何やら、映画「ターミネーター」の世界が現実となりつつあるようですが、いずれにしろ、AI については、自分事として、その動向をしっかりと注視していく必要がありそうです。同書に興味を持たれた方、「知」を愛する方はぜひご一読を。

令和7(2025)年 10 月



一般財団法人 かながわ水・エネルギーサービス
理 事 長 松 井 聡 明